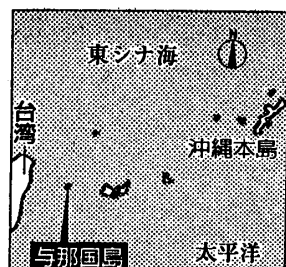


## 与那国島の伝説とその背景

### 東 喜 望

はじめに

私は、一九九七年度の後期、本学の「研修休暇」の制度に則り、調査・研究に従事した。研究課題とその期間は、左記のとおりであるが、本稿は、その成果の一端を報告したものである。



研究課題 「八重山群島叙事伝承の研究」

研修期間 一九九七年九月二四日―一九九八年三月三二日

いうまでもなく、与那国島とは、日本最西端の島である。東西に長く延びた地形で、その東端を東崎、西端を西崎という。よく晴れた日には、この西崎から台湾が見えるという（後掲地図参照）。

北緯二四度二七分、東経一二三度〇分。面積二五七・八〇〇ア

ル。周囲二七・四九一キロメートル。所帯数約七〇〇戸。人口一七五二人（一九九七年十月末現在）。

島名は方言でドウナン。島の主邑は、祖納<sup>そない</sup>。島の北岸のほぼ中央にあり、役場や警察派出所、郵便局などもここにある。西端に久部良<sup>くぶら</sup>があり、南岸のほぼ中央に比川（旧称・鬚川<sup>ひすい</sup>）がある。現存する集落はこの三村である。ほかに桃原<sup>ももはら</sup>・島仲という集落があったが、今は廃村となり、その集落跡がわずかに残るのみである。

南岸に突き出た岬がある。これを新川鼻というが、近年、この新川鼻沖二五〇メートルの海底から巨大な石造物が発見された。神殿跡ではないかと推測され、再びムー大陸のロマンが語られるなど、世界の注目を浴びている。発見者新高喜八郎氏（ダイバー・祖納在住）によれば、水深五〇メートルのところにあるというが、氏の撮影した写真（写真1）やビデオによれば、これは明らかに人工のもの

であり、何らかの目的で石（玄武岩か）を切り出して造られたもので、のちに水位があがったか、または陥没して海中に沈んだものである。それにしても、こんな広大かつ巨大な石造物をだれがいつ頃、何の目的で造ったのか、謎は深まるばかりである。あるいは、与那国島は今なお、新たな伝説を生んでいる島なのかも知れない。

国境の島という地理的な重要性もあって、この島については、明治以来、いくつかの調査報告書や研究書があり、近年は、地元の研究者や与那国町教育委員会によって、同類の文献が刊行されている。これらの学術的成果をも参考にし、この島に伝わる貴重な伝説を保存するためにも、ここでは、まず、この島の伝説を分類・整理して記載した。次いで、各説話についての補足や事実関係、考察などを解説のようなかたちで記述した（ただし、省略したものもある）。したがって、本稿は、一般にはあまり知られていない沖縄県与那国島の伝説を、口承文芸の資料として紹介したものである。

分類に際しては、「実話」とおぼしきものでも、既に久しく時を経て、伝説化しているものは、積極的にとりあげることにした。ただし、朝鮮済州島民の漂着（一四七七）など、明らかに、歴史上の事実と確認できるものは、これを省略した。引用の各説話の出典は、記号で示し、その書名は最末に掲げた。

なお、この調査・研究を成すにあたって、殊に、与那国町教育委員会との協力を得た。記して厚く御礼申し上げたい。

## 一 創世伝説

この島にいつ頃からヒトが棲むようになったのか、その考古学的な年代は明らかでないが、この島の創世に関しては、次のような伝説が伝えられている。

### 1 ティダンドグル（太陽所）

南方から陸地を求めてやって来た男が、海上にドニ（土根）を発見し、ヤドカリを放って人の棲息の可能性を確かめ、家族と共に移り住んだ。子孫もふえた、ある時、四か月間も大雨が降り、人々は洞窟に隠れて暮らしていたが、食糧もなくなり、火種も消えそうになった。そんな時、一人の老人が現れ、「濡れていても竹がよく燃える」と教えてくれた。人々は竹を集めて燃やし、ようやく寒さをしのぐことができた。

やがて、雨も止み、雲の切れ間から太陽がさした。こうして、島びとは救われたが、四か月ぶりに、日光の射した場所を「ティダンドグル（太陽所）」という。

【池間 一九七二：教委 一九七九（文）】

このティダンドグルは、祖納そないの中道なかみちの三三八番地とされ、現在、拝所となっている。この伝説は、地名由来をも語る創世伝説であるが、おそらく太陽信仰を基盤にして形成されたものであろう。また、

この島に「ドネ（土根）」の観念のあるのを示していて貴重である。「ドネ」とは、海中からぼっこりと土が現れて形成された陸地のことである。噴火などによって、海上に島ができるように、海中に陸地が新たに出現するのを島民は信じ、それを期待もしていたようである。

## 2 ドナダ・アブ

大昔、島民は山野の木の実や蔓の根、海の幸たる魚貝類をとって食べていた。

ある日、青く澄みきった大空が、橙色から赤色に変わり、紅の炎に変わって火の雨が降ってきた。島は焦土と化し、生きとし生けるものは皆焼き殺されてしまった。

ところが、神の声に従って、「ドナダ・アブ」に隠れていた一家族だけが生き残った。この家族の子孫は、耕すことを知るようになり、生産物の余分を貯えた。こうして、以後、島は栄えるようになった。

【池間 一九七二】

「アブ」とは、地底に形成された細長い溝状の縦洞穴のことで、珊瑚礁を土壌とする島に多く、地下水の通路となっている所もある。「アブン」という地（徳之島）もある。

このドナダ・アブは、旧・島仲集落の東方にあるブシキという地の畑中にあるというが、この伝説は、このドナダ・アブを聖地とし

てあがめた人たちによって語られた話であることはまちがいない。霊洞信仰と水神信仰を基盤として形成された蘇生譚と考えられるが、島民の農耕による定住を語っている点でも注目されてよい。韓国済州島の三姓穴神話に通ずるところがある。<sup>1)</sup>

## 3 イヌガン（犬神）

琉球王府へ渡る久米島の貢船が漂流して無人島に着いた。この船に、男たちにまじって一匹の犬と一人の女が乗っていた。

漂着した久米島の人たちは、上陸して、やむなく、ここで暮らしたが、ある夜から男たちが一人ひとりと行方不明になった。男たちは全員、犬にかみ殺されたのである。それから、女は犬と一緒に洞穴で暮らした。その地が「イヌガン」である。

その後、小浜島の男が漂着し、犬を殺して女と結婚し、女は五男二女の子どもを生んだ。男は一度小浜島へ帰ったが、再び島へ戻り、それまで秘密にしていた、犬を埋めた場所を女（妻）にしゃべってしまった。

その夜、女は家出して、その場所で、犬の骨を抱いて死んでいた。殺した犬を埋めた場所を「イタ」という。「イヌガン」の南東方にある大きな扁平の黒い石が、この「イタ」だという。女の生んだ子供たちが拓いた島が与那国島である。

【池間 一九七二・教委 一九七九（文）】

祖納の集落の南西側に高い崖(標高約100m)があり、この辺り一帯を「ティンダバナ(天蛇鼻)」といって、県指定の名勝地になっているが、ここには洞穴があつて、今も湧水が流れている(写真2)。この洞穴が女と犬の棲んだ「イヌガン」で、与那国町指定の民俗文化財となっている。

このような犬と女との婚姻譚は、宮古島にもあり、海南島から華南一帯に伝えられているという。与那国島を小浜島や久米島の属島として位置づけようとする作意の感じられる伝説である。

## 二 豪族伝説

この島も、十五世紀後半から既に階級社会に発展していたようであり、次に示す英傑伝説はこのことを語っている。ちなみに、与那国町教育委員会の調査によれば、後掲のサンアイ・イソバの生居地のほかにも、ダンヌ遺跡やドナンバラ遺跡に、明らかに按司屋敷の跡が認められるという【教委 一九七九(文)】。いうまでもなく、「按司」とは領主のことである。

### 1 サンアイ・イソバ

サンアイ・イソバは、サンアイ村(のちの島仲村)の出身で、開田を行い、牧畜を営んだ。彼女が開いた水田は、現在の南帆安(ハインダン)一帯で、その牧畜場はサンバル牧場である。

サンアイ・イソバには、四人の兄弟があり、この兄弟をそれぞれドナンバル村・ダテイク村・ダンヌ村・ティバル村の按司となし、自らはこの島の首長となった。そして、「内治を良くし外患を防ぐ」という施策をとって島を統治したという。

一五〇〇年、石垣島を統治していた英傑・オヤケの赤蜂(波照間島出身)が貢租を拒否して、琉球・中山王府に抗したため、王府は、宮古島の首長・仲宗根豊見親玄雅に命じて赤蜂を征伐させた。この時、宮古軍の統率者は、玄雅の嫡子・仲屋金盛であるが、彼は赤蜂を鎮圧したのち、与那国島を攻撃し、ドナンバル村・ダテイク村を焼き払い、按司を殺した。

イソバは島民をひきいて、宮古軍と戦い、これを撃退したという。

【池間 一九七二・池間苗 一九七八・教委 一九七九(文)】

この伝説は明らかに与那国島の英雄伝説である。イソバの子孫は現在も続いており、イソバの功績を讃えて、その子孫を中心に島民がこぞって、祭りを行っているという。この祭りは「島仲祭り」といわれ、壬午(みづのえ)の日に島仲集落の遺跡で行われるという。

島仲集落は、今は廃村となつてその集落跡が残されるのみであるが、元はナウンニ・アラガ・サンアイなどの邑(むら)から成っていた。池間栄三氏によれば、「サンアイ」とは、方言で、「榕樹」、即ちガジマルのこと。ガジマルの生い茂つたムラという意味であろうが、こ

の邑がイソバの拠点だったことはいうまでもない。ここに、イソバの生居地が今も残っているという。与那国町指定の史跡である。

イソバの兄弟の一人が按司となつて治めたドナンバル村の跡も残っている。祖納から南東約二・五キロの位置で、地名は南帆安（ハインドン）。按司屋敷を中心に広範囲にわたり集落の遺構があり、ここから土器や陶質土器・青磁器・白磁器・安南焼・南蛮陶器など多数の遺物が採集されているという。いうまでもなく、この遺構が宮古の仲屋金盛に焼き払われたとされる村の跡である。ドナンバル按司の妻ブナダラの墓もサンニヌ台の近くにある。同じくこの時、焼失したとされるダテイク村の地名は、祖納の東方約三・五キロの地（現称・屋手久）に残されているが、集落の遺構については、未詳である。

同じ兄弟の別の一人が按司となつて治めたダンヌ村の遺構も残されている。それは、久部良より北東方に五〇〇メートル離れたところであり、按司屋敷の跡や村びとの使用した洞穴の水源地が残っているという【教委 一九七九（文）】。

ちなみに、「ティンダバナ（天蛇鼻）」へ向かう山道の入口近くには、「女傑サンアイソバ」の石碑が立っている（写真3）。仲屋金盛の侵攻を撃退したイソバを顕彰するためのものであるが、このことは前述の「鳥仲祭り」とあわせて、今になお、イソバの事績をこの島が浪漫的に語っている証左でもある。イソバの事件は、与那国島の史実でもあるが、それを超えて浪漫的に語られている点で、

「伝説」に分類してよいだろう。

生き残ったイソバの兄弟や一族がいつ頃までこの島の支配階級（按司）として存在し得たかは明らかでない。おそらく、琉球・中山王尚真の中央集権化に伴って、力を失い、完全に王府の支配下に入ったと見てよいだろう。

『琉球国旧記』巻之九、「八重山記」所載の「遠波高根所」に次のように記されている（訓点、引用者補）。

昔、八重山西表村ニ、有祖納堂ナル者。此人、生質剛勇、膂力過人ニ。身長六尺余、嘗于遠波嵩、構ヘテ家ヲ而居ス焉。一日、天気晴明、四顧雲散。独登リ高山ニ、遥望ニ光景ヲ、只、見ル西方ヲ。有リテ島如シシ雲ノ。祖納堂見レ之ヲ急催ニ精兵數十人ヲ并撥ニ戦船ヲ。往討ツ与那国ヲ。大ニ獲テ捷勝、生ニ擒リ酋長二三人ヲ回ニ至八重山ニ。後、八重山、納款ス中山ニ。時ニ祖納堂、細ニ將此事ヲ、具ニ奏ス中山ニ。遂ニ以テ為ニ中山轄下之地ト矣。自レ此而來リ、与那国ノ船舶、往來ノ八重山ニ時、必ス繫ニ船ヲ于西表島ニ、必ス到ニ祖納堂家ニ。而シテ拜ス火神ヲ焉。

同様の記事は、『遺老説伝』巻之二にも記されているが、精兵數十人を伴って与那国島を攻撃し、酋長二、三人を捕虜にして八重山に凱旋したという祖納堂とは、いったい誰であろうか。ここにいう

西表村とは、現在の西表島祖納であるが、ここに居住した祖納堂については、諸説がある。たとえば、池間栄三氏は、『八重山島年来記』等の記事を根拠に、祖納の豪族・慶来慶田城用緒の嫡子用庶とし、<sup>3)</sup> 那根亨氏は、同じ村の豪族・大竹祖納堂儀佐だとしている。<sup>4)</sup> だが、両氏とも、祖納の豪族による与那国島侵攻を否定し、那根亨氏は儀佐を西表島と与那国島の友好親善をはじめて結んだ功労者としている。

『八重山島年来記』の成化十三年の条に、「同十三丁酉 慶来慶田城嫡子石戸の生年。俗名祖納当、後名、与那国与人」とあり、正徳五年の条には、「同五庚午 祖納当、与那国与人(ト)成ル。是ヨリ始ル」とある。また『慶来慶田城由来記』冒頭には、次のように記されている。

一、錦芳氏先祖慶来慶田城と申(す)人、役名西表首里大屋子用緒。

一、二代嫡子野底当と申(す)人、役名与那国與人用庶。

一、三代嫡子祖納当と申(す)人、役名西表首里大屋子用尊。

(以下、略)

慶来慶田城家初代の用緒は、一四八三年、石垣島平久保の按司を攻撃して、その勢力を拡張した人物で、のち、琉球・中山王府に認められて、西表島の最初の役人として、弘治十四年(一五〇一)、首里大屋子に就任(『八重山島年来記』)している。以後、この慶田城家は、八重山の士分となる。この用緒の嫡子が二代目の用庶である

が、以上に掲げた史料からわかることは、この用庶が一四七七年(成化二三)に生まれ、一五一〇年(正徳五)、三十四歳の時、与那国島の与人になったということだけである。与那国島を攻撃した事実とは、どこにも記載されていないのである。

従って、『琉球国旧記』卷之九や『遺老説伝』卷之二に記された祖納堂とは、那根亨先生が指摘するように、大竹祖納堂儀佐とすべきかも知れない。那根氏によれば、儀佐の住んだ家が、「おはたけ(遠波嵩)根所」だからである。だが、王府が、与那国島をその支配下に入れる契機をつくった人物として、祖納堂を賞賛しながら、この大竹家が、なぜ以後なお平民にとどまったのか、疑問の残るところである。

ちなみに、この祖納の集落は、西表島西端の小さな半島にあり、現在は半島の根元の方へ移っている。この現・集落を「下原(サンバレ)」という。だが、元の集落は、半島の先端にあつて、これを「上原」というが、この上原に慶来慶田城家と大竹祖納堂家の、家敷跡と御嶽が残っている。慶来慶田城の家敷は、外海のよく見える場所であり、面積も広く、石垣をめぐらし、明らかに小グスク(城)を成している。

現地の研究者石垣金星氏の調査によれば、大竹祖納堂家は代々、鍛冶を職とし、近年、同家の墓の下から、中国から輸入されたらしい鉄塊が発見され、同家が中国や南方との貿易に関与していたことが明らかになったという。とすれば、『琉球国旧記』に記されたよ

うな武力を持つことも、この大竹祖納堂家には可能だったといえる。いずれにしろ、一五二〇年以降、与那国島が自島の按司の勢力をそがれ、王府派遣の役人によって支配されるようになったのは事実である。

## 2 ウニトラ（鬼虎）

ウニトラは、元・宮古島狩俣の出身。十歳の時、宮古島が飢饉になり、与那国島の商人に米一斗で買われ、与那国島へ渡った。身長一丈五寸。三斗俵ほどの頭をした巨人で、武勇無双、智謀拔群だったので、たちまち与那国島の酋長になった。だが、彼の存在は、同島の与人の権力をおびやかすことになり、与那国与人は、ウニトラが謀反を企てていると中山王府へ訴え、援軍を請うた。尚真王は宮古島の頭・仲宗根豊見親玄雅にウニトラの討伐を命じ、愛剣治金丸を貸与し、玄雅はその子・仲屋金盛をはじめ金志川金盛ほか勇者二十四人を伴って与那国島へ渡った。この時、波照間島の豪傑・ウヤミシヤ・アカタナも参戦し

たという。ウニトラは奮戦の末、ついに討ちとられ、その首は塩づけにされて、中山王府へ送られたという。宮古軍は、他の捕虜と一緒にウニトラの娘を捕らえて凱旋したという。

【池間 一九七二・池間苗 一九七八】

『宮古旧記』によれば、玄雅がウニトラを討ったのは、嘉靖年間（二五二二―一五六六）と記されており（二五二二年説あり）、同書には、この事件の経緯が詳述されている。<sup>5)</sup>

この事件は、制圧者側の仲宗根豊見親一族にとっては、誇るべき一大事業であったと見え、宮古島には、その功績を讃える叙事詩（あやご歌謡）が伝承されている。煩をいとわず『雍正旧記』所収の「あやご」を引いておきたい。<sup>6)</sup> 以下引用の前半は、最初失敗に終わった与那国島進攻が二度目に大勝利したその戦功を讃えたもので、後半は捕虜となったウニトラの娘のその後の消息を語ったものである。

## 仲宗根豊見親八重山入の時のあやご

- 一、空広とよみが豊見親あやごのあやごどそ
- 一、おきなから、美御前みおまから、美御みおこえ
- 一、空広とよみよ宮古みやことなめてやまれば

## 【通釈】

これから仲宗根豊見親空広のオヤゴを歌います。

中山王の御声みこゑがかりもあり、

空広は、宮古島の全住民に尊敬されているので、

- 一、豊見親を島となめてやまれば
- 一、吾が宮古む、大宮古む、さかやん
- 一、大八重山の、下八重山の人よ
- 一、返せ見だ戻せ見たていりば
- 一、返されの戻されの、ねたさから
- 一、十百その、十百さの中から
- 一、手まさりやは、手とよみやば、いらび
- 一、大平良、大むそねからやだ
- 一、中屋かね兄の金盛よ
- 一、堀川里、こむり里ならとよ
- 一、上比屋さと、東里ならとよ
- 一、大川盛与那覇む、たらとよ
- 一、崎原の、いり崎のかあらもや
- 一、すみや大つゞの主つかさと
- 一、ありや生り、ふこり殿うふちと
- 一、金志川の、豊見親金盛とよ
- 一、城なぎ、うと、なきたつとよ
- 一、砂川あふがま、つゞの主とよ
- 一、下地生れ、もてやにぎやもりとよ
- 一、川根のまんいりの、まんぎやりとよ
- 一、来間生り、わりみやの殿とよ
- 一、野崎生れ、赤宇立親とよ

豊見親は、島全体から尊敬されているので、わが大宮古は栄えています。

大八重山の、下八重山の与那国島の人を、かつて、「返せ戻せ」とわめき立て攻め入ったが、「返さぬ、戻されぬ」と戦いは失敗に終って、その残念さから、千人の中から、

武芸のすぐれた者を選び、

大平良の、大御宗根からは、

仲屋金盛。

堀川里の、こむり里なら。

上比屋里の、東里なら。

大川盛の与那覇むむたら。

崎原の、西崎のかあらもや、

住屋大つゞの主司と、

ありや生まれの、保久利殿大氏と、

金志川の豊見親金盛と、

城辺付近の、弟那喜太智と、

砂川阿武娥麻の、つゞの主と、

下地生まれの、もてやにぎやもりと、

川根の真西の、まんぎやりと、

来間生まれの、わりみやの殿と、

野崎生まれの赤宇立親と、



- 一、伊良部生れ、国仲のまゝらとよ
- 一、よかい生れ、ひやちのをまのことよ
- 一、神まさりや、いはんとのおもいとよ
- 一、池間生れ、上ましあけのけざとよ
- 一、はなれ生れ、尻すしの座のぜんとよ
- 一、磯はなれ、はげ嶺かみのまんぎやとよ
- 一、かりまたの、みなご地のざもりやと
- 一、かみ屋、大つづおほの主つかさと
- 一、大神生り、豊見親とよみかねせどらと
- 一、土原むたはらの、内原うちばらのおぞろと
- 一、いくさばな、ふあらばなよ、いらび
- 一、大八重山ん、下八重山ん、ひやれいけい
- 一、いくさみやを、ふあらみやを、すせばど
- 一、あけず舞まいを、はべる舞を、さをとれ
- 一、前ねんな、百ももさるき、たうせば
- 一、尻すしねんな、百かなぎ、たうすば
- 一、与那国の島人、へありいけいば
- 一、与那国の、いきはての、鬼とら
- 一、いき向い、へい向い立とれ
- 一、空広が、足なげい、みやはて
- 一、豊見親の、ひさなげい、みやはて
- 一、返す見ど、戻す見と豊見親

伊良部生まれの、国仲のままらと、  
 豊かな生まれの、ひやちのをまのこと、  
 神事に優れた、いはんとのおもいと、  
 池間生まれの、上ましあけのけざとと、  
 離島生まれの尻すしの座のぜんと、  
 磯離れの、はげ嶺かみのまんぎやと、  
 狩俣の、みなご地のざもりやと、  
 神屋の、大つづおほの主司と、  
 大神島生まれの豊見親とよみかねせどらと、  
 土原の、内原のおぞろとを  
 戦士として選び、  
 大八重山へ、下八重山の与那国島へ進撃しました。  
 戦いの勝負をして、食うか食われるかの勝負をして、  
 蜻蛉の舞うように、胡蝶の舞うように、  
 前の方へ百飛びして、敵を倒し、  
 後方に百歩ばかり跳躍して、敵を倒すと、  
 与那国の島人は、走り行き、  
 与那国の行きはてにいた鬼虎は、  
 向かって、立向かって、  
 空広の脚わざや  
 (豊見親の) 膝ひざの技わざを自分と較べ、  
 「返してみよ、戻してみよ、豊見親」と言うと、豊見親も、

- 一、あんやらば、鬼虎
- 一、吾が刀、治金丸ぢかにもる、うき見る
- 一、声かけば、言とのいば、にふさせ
- 一、鬼とらを、うふきだき、たうすば
- 一、む、そなへ、島鎮め、とよたれ

## 鬼虎の娘のあやご

- 一、耳すきりや漲水ぼるみず、肝きもせ思たおやさけ
- 一、中屋主が、美御みおぶけん、やこめ親うやの美御ぶけん
- 一、漲水む、あば見て、おやさけん、あは見て
- 一、志良か川、と、通ひをり、寄合川ど通ひおり
- 一、白明川や、むま屋が、寄合川やあぶやど
- 一、すともての川下くだれ、明さるの川おり
- 一、根間座にまざを越こんな、外間座がまざう越こんな
- 一、あばなけば、つばふむ、いちふけば涙なみだおて
- 一、あが八重山んおたんな、下八重山ん、おりんな
- 一、あたりごと、やたそが、かなさ子、どやたそが
- 一、川んかい、はりをり、水汲みづひがそがりおれ
- 一、豊見親のみをぶけん、やこめ親のみおぶけん
- 一、戻しふいる豊見親、帰しふいるやこめ親

「それなら、行くぞ、鬼虎。  
わが刀、治金丸を受けて見よ」と、  
声をかけると、返事も鈍く、  
鬼虎を大樹のように倒した。  
万事がそなわり、与那国島を鎮めて、豊見親は益々名をあげた。

## 【通 釈】

耳に聞いた漲水。心に思ったおやさけ。  
仲屋主のおかけで、貴いお方の思召しで、  
漲水も私は見て、おやさけも私は見て、  
志良井戸へと通い居り、寄合井戸へと通い居る。  
白明井戸は、ムマヤ(?)の井戸。寄合井戸はアブ(縦洞穴)だぞ。  
朝の水汲み。夜明けの水汲み。  
根間座を越すには、外間座を越すには、  
仰いでは、むせび入り、うつむけば涙が落ちる。  
私が八重山にいた頃は、私が下八重山(与那国)にいた頃は、  
寵児であったが、愛児であったが、  
井戸へ通い、水汲みへ通い、  
豊見親のおかげで、貴きお方の思召しで、  
戻して下されよ、豊見親。帰してくださいよ、貴いお方。

前半は、従軍した豊見親空広玄雅の家来の名や戦いの経過をかなり詳しくあげるなど、客観的な事実に即した叙事詩とみてよいだろう。後半は、捕虜となったウニトラの娘の悲劇を謡ったもので、池間栄三氏の前掲書では、前記のあとにも次のような詩句がつづいていたとされる（記号の「一」は引用者が補った）。

- 一、いむばまば、踏み行き ばなむつば、辿り行き
- 一、そであまの、山の太木が 高木が、そらばなん
- 一、我が家ゆ、見ればど 我が八重山ゆ、見ればど
- 一、我が家の、おもかげの 真面まむてにやん、立ち居れば
- 一、なだととめ、起たなしど よむととめ、起たなしど

### 【通 釈】

海浜を踏み行き 崖路を辿り行き

袖山の嶺の太木の 高木の梢から

我が家の方を見れば 我が八重山を見れば

我が家の傍が 目のあたり立って居れば

涙と共に起たなくなつて 悲しみと共に起たなくなつて

与那国島では、宮古島へつれ行かれたウニトラの娘は、その美貌ゆえに女たちから嫉視され、島民たちにいじめられて、ついに自殺したと語られている。島の女たちは、底をうち抜いた桶をハザマ浜

に置いて、一里先の白明井戸からこの桶に水を運ばせた。沿道には見物人がたかり、謀反人の娘と罵り、石を投げる。娘はその苦痛に耐えかねて、袖山嶺そでやまに入つて死んだというのだ【池間苗 一九七八】。

与那国島のウニトラの住居跡等の遺跡は、未詳である。

### 3 平家落人伝説

「八嶋墓（大和墓共云フ）ヲ拝セント香花ヲ携ヘ村吏二名・嚮導者一名、十一時、字『ブサン』ニ至ル。別紙絵図ノ如ク、山洞側面ニアリ。位置ハ本村ヨリ南東二十余町、往時源平ノ戦八嶋ニ敗レテ、此地ニ遁レタル人ノ墓ナリト。」（『南嶋探験』明治二十六年八月二日の記事）

「大和墓は宇良部山系が東南へ延びたところの左向き斜面に在る。（略）長々とつづく斜面の中腹に、すっかり荆棘に埋もれて沈黙してある洞穴を下から物色した所で、決して見出せるものではなかつたのである。此の墓は何時頃のものと判然してゐない。」（『南島覚書』所収、昭和二十一年七月の紀行文）

【笹森 一八九四・須藤 一九四四】

与那国島の往時、大和墓または屋島墓とよばれた墓地は、平家落人の墳塋とされた。島の東南へ延びる宇良部山の山稜がいったん切れて、さらに東南へ同山系が続く地点から約三五〇メートル離れた、

左側の崖下に在る(後掲地図参照)。祖納からの道程約二・六キロ。所在地名はハイムト(字南帆安の南方)。主に三つの石灰岩洞窟に人骨を積んだ墳塋で、人骨の他に甕・土器の破片が現存する。

須藤利一によると、この洞窟墓には、明治二十年頃まで、曲玉や劔や土器、馬の鞍や長持様のものがあつたといわれ(『南島覚書』)、本山桂川は大正十三年、勾玉・丸玉の残留を確認している(『与那国島図誌』)。昭和十一年、須藤はこの洞窟で、素焼の土器と中国製磁器の破片を採集し、周辺に集落の屋敷跡があるのを発見して、「大和から漂着した人々が土着してその子孫が栄えた」集落の跡だと推定した。そして、伝染病等によって死亡したこの集落の人々を葬ったのが大和墓だろうとしている。

田代安定によれば、明治の初期、与那国島には、平家の末裔と称する家が十七戸もあつたという。その著『八重山群島取調始末摘要』に、次のような記事がある。

与那国島二八、自ラ平家ノ末裔ト唱ヘ名ニ盛ノ字ヲ冠スルモノ十七戸アリ。『南嶋記事外篇』ニ曰フ。其十七戸ノ中ニテ島中鍋ナル者ヲ宗家トシ一門、方言ニテ元祖ト唱ヘテ崇敬シ、現ニ古劍・曲玉等ヲ所持セリ。

近世期から平家伝説が作られていたことを示唆している。

深いジャングルの中にある、与那国島のこの大和墓を私は実見したが、明らかに、これは洞窟墓であり、風葬跡である。このような洞窟墓は、石垣島や沖縄本島、奄美諸島のいたるところにある。た

とえば、徳之島・徳和瀬の海浜近くの洞窟墓(一部掘削して拡張)も平家落人の墓だとされてきた時期もある。与那国島大和墓も、平家落人墓たる確証は全くない。

池間栄三氏によれば、この風葬跡を方言では、ダマトウ・ハガといい、「山奥の境界」の意。語音の類似から大和墓と名づけられ、薩摩藩士が平家落人伝説に付会させたのではないかという。また、一九六四年、九州大学第三次調査によって、墓たる以前に洞窟住居址であつた形跡のあること、遺骨は近世の人骨らしきことなどが指摘されている。

### 三 起源・由来伝説

ここでは、事物の起源や伝来・由来を語る主要な伝説をとりあげる。特定の家の言い伝えなど、個人レベルに属し、ほとんど社会化されていない伝承は割愛した。

#### 1 神岩・トンガン由来

昔、若者二人がトンガンという岩に海鳥の卵があるのを知つて、岩の頂上まで登り、卵を取つて降りようとあたりを見まわすと、針の山のような巖石が四方をつつんでどうしても降りることができない。その内の一人は、無理に降りようとして足を踏みはずしころげ落ちて死んでしまった。これを見たもう一人

の若者は驚き、悲しみぶるぶる体をふるわせながら天上を仰いだり、地にふしたりして神様にお願ひした。つかれはていつのまにか眠ってしまったが、眠りからさめてあたりを見まわしてみると、不思議にも自分は三根崎の地へ来て、身体にはかすり傷ひとつもない。若者は大へん喜んで深く神様にお礼を述べ、て無事に家へ帰ってくる事ができた。

この事があつてから、この岩を尊んで神岩と称すようになり、現在でもこの岩の前をゆききする時は、必ずかぶりものを脱いで通るとされる。

【池間 一九七二・教委 一九七九(文)】

与那国島の東岸に、サンニヌ台という島随一の景勝地がある。海波の浸食をうけた奇岩(玄武岩)が多く、県指定の名勝地になっている。このサンニヌ台の東側の海岸に、とんがって立っているのがトンガンである。その根は常に波に洗われているが、みごとに男根の形をした奇岩である。「立神」<sup>たてがみ</sup>ともいう。

この伝説は、「遺老説伝」卷之一にも記載されており、近世期に既に語られていたことがわかる。おそらく、この奇岩は、当初、性器信仰の対象として崇められ、のち、島や集落の守護神とされたものと思われる。南西諸島の海岸や湾口につき立っている岩のある所があり、これを「立神」(タチガミとも)という。この与那国島から奄美大島・十島、薩摩半島先端の枕崎に立神があり、前述のごとき守護神として信仰されている。奄美大島・名瀬の港口にある「立神」

などはウナリ神として信仰されている。「ウナリ」とは、「姉妹」のことで、ウナリはその兄弟を守る霊力があるとされる。名瀬の立神は、「女神」である。ただ、この「立神」という名称は、大山麟五郎氏によると薩摩側から伝えられたものだとい<sup>7</sup>う。いずれにしろ、与那国島のこの伝説も、奇岩信仰を基盤にして形成されたものであろう。

## 2 ティ御嶽由来

船持屋の仁屋という人がいた。造船技術・航海技術にすぐれ、沖繩と中国との貿易船の船頭をしていた。

ある日、航海中暴風にあい与那国へ漂着し、与那国にて結婚して二男一女をもうけ生活をしていた。長男は松原仁王と名づけられ、父の航海、造船の技術を取得し後継をするまでに成長した。与那国と西表島との航海船の船頭として祖納堂に命ぜられ公事をするようになった。

仁王はいききしている内に西表祖納の野底の屋の娘と恋中となり、仁王は一ヶ月に一回の航海にたまりかね、一夜の内に西表島と与那国島を往復するようになった。その事に気づいた姉のクヤマは弟の身をあんじて、ナンタ湾の海からサンゴ礁を取り寄せて供え、朝夕祈願をおこない、また自分の髪の毛を三本とり船の先に供え、航海の安全を祈りつづけたとされる。それが、ティ御嶽のはじまりである。

【教委 一九七九(文)】

この説話にもウナリ神信仰が生きづいていて、このテイ御嶽という聖地は、祖納の西方のナンタ浜に沿った小高い丘にある。「竜宮の御嶽」ともいわれ、旧暦の一月(日は未詳)と旧暦九月九日に航海安全と豊漁の祈願が行われている。祭主は、松原仁王の子孫といわれる松原寛司氏で、同家には先祖の遺品である、角印や銅製の鏡・勾玉・小刀などが保管されている。ただ、船持屋の仁屋の出身地は不明である。

### 3 おやばる御嶽由来

昔、島仲村に大工屋という家があった。その主人は、ミンガサといわれ、村では屈指の有力者であった。

ある日、八重山の蔵元からミンガサを亡き者にしようとして、罪を問うため呼び出しがあった。身に覚えのないことではあるが仕方なく、順風を待って出発した。

残された弟妹は、大層心配し、妹は弟とともに家にビヂリを立て兄の無事を祈った。その妹の祈願がかなえられ、兄は無事帰ることができた。

それから、このビヂリは御嶽とされ、旅に行く者が無事を祈願する拝所となった。

【教委 一九七九(文)】

この説話もウナリ神信仰の効験を語ったものである。蔵元とは、

王府の八重山支配の機関として、初め竹富島に置かれ、のち石垣島に移されたもので、離島有力者の勢力を拡大させないために、ミンガサのように、有力者に圧力をかけていたものと考えられる。

文中の「ビヂリ」とは、石垣でいう「ビジュル」のことで、神の憑依の石であろう。この御嶽は、祖納の南西方に位置した旧島仲集落の西側にあるという。

### 4 船香炉由来

昔、与那国島には航海する船がなく、生活上不便だったので、島をあげて船を造ることになった。造られた船はスタマウリといわれ、島人はこの船を大切にしていた。

ある日、大嵐で、船はハイヌハマ(地名)に打ち上げられて破損し、使用不能となった。そのため船の香炉は村の最年長者である東久部良家に預けられることになり、のち、我那覇家<sup>がなは</sup>で預かった。ところが、東久部良家では不幸があいついだ。そのため、東久部良家では、船香炉の灰をわけてもらい、新たに船香炉を祭壇に供えるようになった。それで今も両家に船香炉が伝えられている。

【教委 一九七九(文)】

東久部良家は、祖納の東集落にあり、我那覇家は、西集落にあって、両家にこれらの香炉が伝えられている。毎年、一月、四月、十月に祭りが行われる。イスカバイ(衣替)、冬至の祈願を行うとい

う【教委 一九七九（文）】。

## 5 唐芋の伝来

仲宗根豊見親が与那国を支配するようになったころ、アンアイザトシは、それをいやがり中国大陸へ渡り、福州で生活するようになった。

島に残して来た末弟ウトンアと後間家（比川に在住）に嫁いだ妹のことが心配になり、与那国へ帰ってみると、昔ながらの貧しい生活であったため、共に中国に行くようにすすめるが、反対される。帰り際に、カナ・ウンテイ（カナ芋）の種を兄弟に与えた。その種芋のおかげで島民の生活は良くなったという。

【教委 一九七九（文）】

池間栄三氏（前掲書）は、芋作を広めた末弟のウトンアが、のちに、島人からアンアイザトシ（東里子）と尊称され、彼が兄たちのいる福州へ渡って、唐芋の種を入手し、帰島してこれを伝えたとしている。彼らの家数跡は、祖納字与那国三七八番・三七九番地辺りで、妹の嫁ぎ先・後間家も比川の由緒ある旧家だという。また、ウトンアの一家が、中国へ渡ったのも、大屋七兄弟との水田争いに敗れたためだとしている（後掲参照）。また、この一家は、航海技術や造船技術を持っていたとする。与那国町教育委員会によれば、与那国島で最初に作られた船は、「ドナイド」といい、アニシカ七兄弟

（アンアイザトシの兄弟）の中国との航海に使われたという。このドナイドを造ったスラシヨ（造船場）の跡は、祖納の金城信浩氏の家敷辺り（与那国三六七番地）とされ、金城氏宅には、ドナイドの模型が保存されているという【教委 一九七九（文）】。

## 6 比川ミカン（マーンニン）の由来

その昔、比川集落東岸、ウブダイシ深山の南岸に、ある日、唐の船が遭難しました。それにきづいた比川の人々は、総出で救護にあたりました。そして、乗込員を救出して、平得宅におちつかせ、看護をしてあげました。

そのころ庶民は、漂流物等に心はおおせいで、多少の危険や不安をこえて、海外の珍品を手にしたものです。そこで、前竹家の大翁は、先手を打って、彼の遭難者達を自宅に案内して、宿泊させました。そのようにしているうちに、すっかり家族同様になりました。その唐人が申すには「このムラには、このよなものがありますか」と、ミカンを手にもって見せました。「いいえ、そのような物は、はじめて見ました。」と、前竹大翁は答えました。

「あなたに、お礼として、このミカンの種子をあげましょう。」それをもらい喜んだ大翁は、庭にでて、さっそくその種子をまいたのです。その種子が育ち、たくさんのミカンが実り、比川集落全体が、ミカンでうまったと言われ、それが、マーンニ

ンのはじまりだとつたえられています。

【教委 一九七八(民)】

比川には、今もミカンの樹が多い。ただ、この事実関係は未考である。

#### 7 アガマルイチ(赤丸石)の由来

与那国の新川鼻の西側に、ちよつとした入江があります。その渚に、ぼつんと座している赤丸石という黒石があります。この赤丸石はタマゴ型の石で、四方は、遠浅になっているが、五十メートル先方は、太平洋の深海です。満潮前には深海から色々の魚が入って来るので、良い釣場でもあります。

その昔、この赤丸石を釣場にして、毎日、大漁している人がいました。その場所は絶対に他にゆずらず、他の人が何回きてもその人に占領されているので、釣りの好きな人達は、困りはてていました。その石には、一人しか座れないからです。それで、その石を買いとり思う存分、魚を釣ってみたいと考え、相談をもちかけました。俺の家の赤毛の牛一頭と、その石を交換しようじゃないか……。そのようにして、牛とその石は交換されました。

そして、その石にこしかけて、釣りを楽しんだということです。その後、この石はだれいうとなく、アガマルイチとよぶよ

うになったそうです。

【教委 一九七八(民)】

#### 8 ウルク石の由来

久部良岳のふもと、南側に満田原という広い田園があります。その田園の中央よりやや西よりに、南側にかたむいた、ひらたいた大きな古石が座っていますが、これをウルク石といいます。

この主人公であるウルクは、沖縄本島の小禄からきたとされ、人々は、ウルクとよんでいました。このウルク氏は、魔術の名人でありました。ある日、大勢の若者を集めて、話をしたので

その話すことには「ウンナル(地名)竹ヤブを切り開いて、その竹の切りかぶの上で、私と角力をとろうではないか、もしわたしより強い人がいたら、その人の元で生涯奉公人となって働きましょう」と大ばらをふきました。

そこで、島仲部落の川平氏という、力の強い人がおりました。その川平氏は、満田原でたくさん田畑をもっている人でした。「わたしは、川平という者だが、わたしが角力の相手になりましょう」と名乗りでました。ウルクと川平は、試合をするようになったのです。

試合をしたところ、川平氏が強く、ウルク氏を負かせたのです。ウルク氏は目を丸くして、「この島に、自分より強い者はいないと考えていたのに、世の中には、このように強い人もい



るものだ」と負けを認め、川平氏の家で奉公人として、生涯働くことになりました。

川平氏は、ウルク氏を満田原の田を耕作するように、いつけました。しかし、このウルク氏は、自分で働こうとせず、他の百姓たちが野良仕事にくるのを待って、魔術を使い、川平家の田畑を耕させ、自分はこの大きな古石の上に登って一日中あそび、百姓等が、自分の仕事をするのをながめながら楽しんでいました。

ウルク氏は、ある日、百姓達を集めて、牛を連れてこさせ、その牛の肛門から侵入して腹の中をくぐりぬけ、口から出るという不思議な魔術をやつてのけ、人々をおどろかせていました。その事を聞いた川平氏は、牛のおなかを通り抜け、口から出て来ることは、どうでもおかしい、これはたしかに魔術にちがいない。そのたねをあかそうとひそかに高い丘に登り、ウルク氏のやり方をじつと見おろしていました。するとどうでしょう。牛の尾からはい上がり、背中をとおつて、顔の方からおりているではないか。

それがわかった川平氏は、「君は、本当に牛の肛門から進入して腹を通り抜け、口から出たというのか、それはうそだ」と言ったのです。

それを聞いたウルク氏は、愕然として、「では、わたしができたら、生涯の奉公はご破算にするぞそれで良いか。」「君が、

できるなら約束しましょう。」

川平氏は、牛を準備して、「ではやるがよい」と言いました。ウルク氏は、自分が見ていたとおり、やっているではないか。牛の後ろからはい上がり、胴体の中央の方にさしかかったとき、川平氏ももっていたつえで、牛の背中をたたきつけました。するとどうでしょう。つえで思い切りぶたれたウルク氏は、ころげ落ちたのです。

そのことがあつてから、ウルク氏はどこにいったのか、すがたをけしたということですが。それ以来、誰言うともなく、この石を、ウルク石というようになり、今日までその名が伝わっています。

【教委 一九七八（民）】

#### 9 カニマチダヤ（地名）由来

サンニの台南岸四〇〇メートルの断崖にカニマチダヤがあります。この洞穴の入り口は真上からでないと入れない岩窟であり、樹木に覆われていて一見して見分けのつかない位置にあります。この洞穴を住家にして、盗賊を働いて村人達を心憾させた人がカニマチです。

昔々、カニマチという武術のすぐれた盗賊が居りました。もともとは、盗人ではありませんでした。カニマチは、なまけ者で自分の腕力をたてに他の者をいじめ、ごまかし、女性達をだまし悪い事だけをしていました。他人が戒めると、直ちに暴力

でいじめ自分勝手な振る舞いをするので、村人達は大変困っていました。村人達は、遂にカニマチを敬遠し、相手にせず、のけ者あつかいにしましたので、カリマチは、身の置き所がなくなりしました。

ある日カニマチは、海岸線を歩いているうち、樹木に覆われている洞穴を発見しました。ここなら絶対他人に知れないよい場所だ、此の岩窟を住家にして盗賊をしようと考え、縄を吊して下りて行き、その準備をしました。遂にカニマチのなまけ癖は悪となり村里をはなれたのです。

村人達はカニマチの失踪を喜ぶ反面、また不安でなりませんでした。

カニマチは、夜を待ち、マゲを結び、きれいな着物をつけ、美青年に変身して部落に出没し盗賊をやり出したのです。豚や鶏、食料品、着物類といろいろの必要な物資を盗みました。村ではカニマチの出没で、夜になると不安で人々を心憾させました。

困り果てた村人達は、若者を召集しカニマチを捕らえようとするけれど、若者、五、六人は問題にしない豪傑者であり、勝手気ままなふるまいをおこない、カニマチは、遂に陽気になり、悪は増々ひどくなり、今度は娘達までおそうようになりました。さあ、こんな状態では大変とばかり村人達は集会し協議した結果、カニマチ狩りを行うことに決めました。

村人総出で捜索しているうちに、ついに例の場所にロープの吊してあるのを発見しました。これは、たしかにカニマチの仕業に違いないと彼の居所を確認したのです。しかし、洞穴には簡単に進入することが出来ません。村人達は一応引きかえし、カニマチ捕獲を相談しました。色々意見が出されたが、これと思う方法がありません。そこで、枯草や薪を岩窟の上から投げ入れて、火をつけて焼き殺す方法しないと決めかけました。人間を焼き殺すことは人道的に反すると言う意見もあり、困り果てている時、一人の若者が名のり出しました。

その若者は、蔵波太郎というカニマチにおとらぬ腕力ある豪傑者で、自分が彼の岩屋に下りてカニマチを捕らえるからまかして欲しいとの事で、皆一同びっくりして、それではとその作戦を立てたのであります。そして、明日の未明にカニマチの寝込をおそうように決めました。蔵波太郎を先頭に、カニマチが気付かないように忍び進入させ、二人の格闘している後から次々に下りて捕獲する作戦を立てました。

待ち兼ねた未明が来ました。蔵波太郎は吊し縄をつたって下り始めたのです。ところが寝ているはずのカニマチは明かりをともしてマゲを結っているのです。蔵波太郎が下りたとき、気付いたカニマチは、血相をかえて髪を振りみだし、カンザシをつきつけて、向かって来ました。蔵波太郎は、これ悪盗めとばかり飛び込んで二人は、上や下への大格闘が始まりました。

一方上の応援隊は威声をとどろかせ次々と岩屋に下りて行きましたが、すでにカニマチは蔵波太郎に仕とめられて息を引きとっていたということです。

盗んだ品物は岩屋一ぱい山積みにしてあり、飯は煙が立たないように、盗んできた機織のオサでたいていたと言うことです。皆の者は、蔵波の武勇をほめたたえました。

ところが、カニマチを殺した罪が蔵波家にたたり、蔵波家の子孫は絶えていったとの口承が残っています。

その後、この洞穴はカニマチダヤと言うようになりました。そのことがあってから現在までなまけるとカニマチになると言われています。

【教委 一九七八（民）】

#### 10 ナーガンシ（地名）の由来

ナーガンシは、島の東北の島影の海上で、海が静かなときでも年中白波が立っている特別な場所で、そこをナーガンシという。

昔ある日、妊婦が大きなおなかを抱えざる笊を手に持ち、明日の食事の準備にと、ヌクヌキ（地名）畑に出かけました。

ヌクヌキ畑は、島の中央を東西に続く山なみの裏側にあり、へび型にまがったウブダミテ（地名）の坂を登って行かなければなりません。

その妊婦は、休み休みやつのことで坂を登り、畑に行き、

芋を掘りざる笊いっぱいに入れて頭に乘せて家へ帰る途中、その坂道ウブダミテにさしかかりました。ほっと一休みと坂の上で立ちどまり、前方をながめると、大海原の方にいつも見たことのない大きな島影が見えるので、不思議に思い、頭にのせた芋の重さも忘れて見つめていると、その島が動くけはいがあるので、しばらくようすを見ていました。するとだんだん近くなるので、妊婦は、なお不思議で一人じつと見まもっていると、島の近くまで流れてきたとたん、妊婦はだれに言うともなく、「あれ島が流れて来たよ来たよ」と指さしながら大声でさげぶと、それを聞いた村人達は、「どこだ、どこだ」と騒ぎ出す中に、島はしだいに沈み行き、とうとう見えなくなり、その場所に沈んでしまいました。

村人達は、妊婦が坂からおりて来るのを待ちうけて、その事を聞き、妊婦にその場所を案内してもらいました。するとその場所は白波が立って居たということです。

それから、災難や事故のある場合に妊婦が人より先にでしゃばったり、人より先に口ばしりするのを禁止されており、現在まで伝えられてきています。

そのナーガンシについて、島の漁民達の話によると、その近辺で魚つりをする時、鶏の鳴声が聞こえてくると言われています。

【教委 一九七八（民）】

この場所は、島の東崎から祖納方向へ向かう海岸線の干瀬びせにある(写真4)。確かに天気の良い時でも、常にこの辺りは、白波をたて、波の音が高い。「ナーガンシ」は、鳴く岩石の意であろう。海底の地形と海峡の気流がこのような荒波をたてているのであろうが、海中に出現した島が、流れ寄り、この海辺で沈んだとするのは、前述した「ドニ(土根)」の観念によるものであろう。さい果ての小さな島に住む人びとのいだいた共同幻想といえるかも知れない。

#### 11 カサハンディ(地名)の由来

帆安ウブディバルに、カサハンディというところがあります。ここを通るときは、カサをとって通れと言う意味です。

昔、ドナンバル按司が、ハイモト海岸より大きな岩を足げりして、その落ちるところが私の墓場だと言って、けりとはしたそうです。その石は、今ウブデバル(浦崎永貴所有)の畑の中に残っております。

ところが、その石のところには按司の墓はありません。ドナンバル按司に対する敬意の意味でカサを取れといったのがその地名となったそうです。

【教委 一九七八(民)】

#### 12 ニニウルシ(地名)の由来

昔、ダノマカナ(八重山加那)と言う人が、与那国で人目を忍んで山中に住んでおりました。その男は、人頭税をのがれる

ために石垣島から渡って来た人でした。

その男のゆくえをさがしに横目伊野加という役人が、牛をつれてまきとりという名目で、ウブンド山深く入りこんでいきました。すると、島の南の海岸アラガ津口の近くの山で、丸木船をほりはじめてあるのが見つかりました。それを見た伊野加は、たしかにこの男が島を出るために計画したものにちがいないと思いい、そのクリ舟を牛にひかせて帰る途中、加那は、山の上から見下ろしておりました。

「おおい、俺の舟を取って行くのは、だれだ」と、さげびました。

すると伊野加は、「この舟は私が必要だから私にくれ、そのかわり、着物や食糧を持って来てあげるから」と、言って、そのまま持つて帰り、あくる日、食物や着物を持つて行ってやりました。そうしているうちに、二人は友達になり、マキや材木を取って準備しておいて、ともにつきあいをしておりました。月日がたつうちに、加那も改心して、とうとう山を下って来たそうです。

その後、だれ言うもなく、その場所をニニウルシ(舟おろし)と、よぶようになりました。

【教委 一九七八(民)】

#### 13 チヌンマヤ(地名)の由来

ナブガ豊見親は、今のナブガ(長若)家の祖先に当たると言わ

れている。ナブガ豊見親はハイ・ンダン、ナタ・スグ、シタブル一帯の田地を所有し、この広大な田畑を自作していたほどの頑丈な働き手であった。

当時、与那国島に慶田城大爺と言う智謀にたけた人物がいたが、彼は日本内地から検地の役人が来島することを知り、ウラ・バルミ（北浦野）で、その船の現れるのをまちうけていた。ナブガ豊見親も役人の来島を既に知っていたが、彼は実直な人物であったと見えて、吾が家で遠来の客の接待準備をしていた。

船が見えた知らせがあつたので、豊見親は急いで迎えに出たが、既に検地の役人等はウラ・バルミから上陸し、慶田城大爺に案内されて、浦田から帆安一帯の検地を終つたところであつた。しかも美田はことごとく慶田城家の所有に帰していた。豊見親は憤然として南帆安へ行つて見ると、不思議にも、自分の所有田が一ヶ所だけ変更されなくて残つていた。豊見親が、その田を見て、チヌンマヤ（不思議な田）と叫んだのが、その田の名称となつて伝わっている。

【池間 一九七二】

水田をめぐる抗争説話である。長若家は今も続いていて、毎年、村祭の折、豊見親の屋敷跡で、司（かま）（女神職）一行を迎えて祭祀を行っているという。智謀にたけた慶田城大爺家の子孫は絶え、その家も瓦解したようである。

なお、薩摩役人による与那国島の検地が行われたのは、一六一一

年（慶長一六）二月以降。検地役は毛利内膳正元親ほか（伊知地季安『西藩田租考』）。

#### 14 木造建築の起源

ある時、与那国の上空に異様なものが飛んで来て、七日七夜中空に旋回していた。島の人々は寄り合つて、あれよあれよと騒ぎ立てていたが、容易に落ちてくるようすもなかった。ところが、大屋の七兄弟が、村人の懇望によつて、その集合場所に現れるや、不思議にも空の異様なものは、忽ちに落下した。その落下地点はナガンアテ・カブサ附近であつたと伝えられている。この天来の異様なものは、差桁式建築の模型であつた。今日保存されている模型は、尺足らずの細工材四本を井桁のように組み合わせたものである。大屋家ではこの模型をカンダナ（神柵）と言つて、今に到るまで保存して、毎秋、祭祀を行っているが、現在の与那国島の木造建築の様式は、これから始まつたと伝えられている。

【池間 一九七二】

旧来、丸太を柱とし、竹や細木を使って屋根や壁の骨子とし、その上に萱等をのせて葺いた家屋が、角材を使用した建築に変わったことを語る伝説である。大屋（ウブヤ）家は祖納在住の一族で、その先祖に七兄弟があり、水田開発に大きな功績を残したという（次節参照）。

## 四 七人兄弟伝説

七人の兄弟が力を合わせて、ある事業を大成するという伝説で、中国から渡来した七人の兄弟が、それぞれ村を創建したという伝説が宮古島にも伝えられている。これらの説話の基本的なモチーフは、おそらく中国から伝えられたものであろう。敵対者の迫害をはねのけて、勝利を得る「九兄弟」や「八兄弟」の話が中国で伝承されているからである。

与那国島のこの伝説は、以下に示すように、祖納の大屋（ウブヤ）家と天底（アニシカ）家との水田開発をめぐる抗争譚として語られている。なお、須藤利一も、つとに、与那国島に七人兄弟の話が伝承されているのを指摘している【須藤 一九四四】。この兄弟伝説が、派生的に生んだ、唐芋の渡来や、造船・建築様式の起源に関する説話は、前述したとおりである。

## 1 大屋七人兄弟と天底七人兄弟

タバル川流域、クバタ及びマンタバル地域等の水田を始めて開拓したのは大屋の七兄弟であったと伝えられている。その昔、ソナイ村の大屋（ウブヤ）に七人の兄弟が生れたが、貧乏者の子沢山のたとえにもれず、極貧の暮しをしていた。七男目が生れた時は、大屋には又、ギチ（奴隷）が生れたそうだと、親類

から冷笑された。七兄弟の父親は、この言葉を聞いて、親類さえもこのようだから、他人は尚更だろう、と残念に思い、夜着をかぶって無念の涙を流したと言う。七兄弟の父親は終に発憤興起して、開田を行い、七兄弟も亦長ずるに従い、よく父の業を助け、千古不伐の密林湿地帯を切り開いて美事な田地にした。今日の与那国島の米倉と言われているタバル川流域の水田を見ると、その事跡がしのばれる。

大屋の七兄弟が水田開拓に着々歩を進めている時に、同じくソナイ村に天底（アニシカ）の七兄弟が住んでいた。この兄弟の七男目は、後にアンアイザトシと尊称されたので、天底の七兄弟はアンアイザトシの七兄弟とも言われている。この七兄弟が理不尽にも、大屋の七兄弟の開拓した田地を奪い取ろうとしたが、大屋兄弟の父親が、このことのあるのを既に予知して、石に大屋の印を刻み、田地を開く毎に、その石を田に埋めておいたので、それが証拠となって、遂にアンアイザトシの七兄弟は敗退したと言う。このことで、アンアイザトシ以外の六兄弟は豊見親（当時の統治者）を逆恨みして福州の地へ移住したと伝えられている。

【池間 一九七二】

アニシカ（天底）兄弟の福州移住については、「脱島伝説」の節で詳述する。以下では、唐芋を与那国に伝え、アンアイザトシ（東里子Ⅱ役人の階位）と尊称されたというアニシカの末弟ウトンアの最

期と、福州へ渡ったアニシカ兄弟の子孫についての伝説をとりあげる。それは、「アニシカ七人兄弟」後日譚の一説ともいべきものである。

## 2 ウトンア（アンアイザトシ）の最期

与那国島へ芋を伝えた恩人アンアイザトシに最後の時が来た。彼は福州から度々迎えの使者が来たが、その都度福州行きを断ってきた。福州の兄弟達はとうとう業をにやして、彼を強引につれ出すために船を発した。彼は一種の変質者であったと見えて、故山をはなれたいばかりに死を決し、比川村の妹を誘い出して、アンダと言う所で切腹して最後を遂げた。彼は死に臨んで腸を抜き、アンダの小川で洗って吸物にして妹に与え、それを喰するのを見ながら満足して死んでいったと伝えられている。アンダは比川部落の東の出入口にあつて、小川が流れて白砂の浜に注いでいる。一説によると、アンアイザトシの自刃の場所は、祖納と比川間の旧道の途中にあるナブグ・ダヤであつたとも言われている。彼の屍は比川部落の西方の谷間にあるイシタ・ダヤと言う岩窟内に風葬にされている。切腹に用いた脇差は屍と一緒に洞窟内にあつたが、某旅行者が密かに島外に持ち出したところ、東海で台風にあつて、船諸共に海中に没したと伝えられている。近年まで、イシタ・ダヤにある彼の遺骨は、アニシカ家と関係のあつた人々に守られ、毎年旧一月十六日に

は礼拝を行っていたと言う。

【池間 一九七二】

## 3 首なし墓の話

昔、アニシカ家に七兄弟のうち、六人が中国の福州に渡り、永住するようになりました。その後、幾日かが過ぎ去り、ある日、与那国島のナンタ浜に唐船が漂着して来ました。その漂流船の中に、アニシカ家の子孫である親子が乗っておりまして。しかし、その時のきまりとして、ナンタ浜でその乗組員を隔離して置き、もしそこをぬけだすものは、打ち首にすると言い渡しておきました。

ところが、そのアニシカの子孫の息子の方が自分の先祖の地に来た以上は、先祖のお墓を拝まなければならないと、夜ひそかに隔離場をぬけ出して、アニシカ家の墓を礼拝して帰る途中、夜散歩していた多加島と前底という二人の青年に見つかつてしまいました。それを見た多加島は、これは、ただではゆるせない、その男をひつとらえました。

しかし、前底は、多加島をなだめ、「きのどくだ。これを見たのは、私たち二人だけだ。私達が、その事をもらさなければ、だれも知らんですむからのがしてやれ」と言いました。

それを聞きいれずに、とうとう村番所の役人につきだしてしまったのです。きまりによって、とうとう、その男は打ち首の刑となつたのです。

そのとき、その子の父親は、非常にくやしがり、「息子が島の規則をやぶり、誠に申しわけありません、その謝罪に、私にその首をうたしてください。そして、その首は、私にください」と、役人に申しでて許しを受け、自分で我が子の首を打ち、首は唐にもち帰り、その胴体はその島にうめました。

それが首なし墓であると言われております。

【教委 一九七八(民)】

2にかかげた伝説は、ウトンアの自刃の真相が不明瞭である。故郷を去りがたく自刃したとするのは、不自然だからである。3の伝説を見ても明らかのように、アニシカ一門に対しての反感のようなものが島民にあり、そのことから推しても、島民とウトンアとの間に何らかの軋轢あつれきがあつたとすべきが妥当であろう。アニシカ一門は、元来、島役人の勢頭役をつとめたという。その横暴な行為に対する島民の不平が背景にあるのかも知れない。

3の伝説についていえば、池間栄三氏は、多加島を棒技や空手を会得した腕力者で、漂着した親子の番人だつたとしている。また、親子を隔離した場所も、「ウティミティ」という地名の山中だつたとし、多加島の残酷な仕打ちを見た父親が発作的に我が子の首をはねたとしている。前底なる人物も登場しない(前掲書)。このように、伝承者によって、僅かながらその内容が異なっている。

斬首された子息の墓は、ウティミイという畑の中にあり、今にな

お、その墓を島民は、「ミンブル・ミヌ・ハガ(頭なしの墓)」と言っている。その位置は、祖納から久部良方面へ向けて十山橋を渡つた右側の畑中だという。饅頭型の石積み墓。

## 五 脱島伝説

### 1 アニシカ兄弟の渡島

アニシカ(天底)の七兄弟は、オプヤ(大屋)の七兄弟に敗れて後、このような小島に暮らすよりは中国大陸へ渡つて暮らした方が得策と考えて、密かに内輪相談をしたところ、末弟のウトンアだけは、自分は生まれ島を去る気にはなれない、と言って、その相談に応じなかった。それでアニシカ家の人々はウトンアと当時比川邑の後間家に嫁していた妹を残して、一族を引きつれて中国へ出発した。アニシカ家は代々勢頭を勤めていた家柄であつたので、途中無事に福州の地に到着し、其処に定着して漸次栄えていった。

【池間 一九七二】

### 2 比川四家の脱島

人頭税の苦痛に耐えかねて、比川集落の浜川屋・兼盛屋・兼久屋・後間屋の人々は、南方にハイ・ドゥナン(南与那国)という楽土があると妄信して、その島を求めて脱島した。

【池間 一九七二】



2は、普陀落渡海の一つで、渡海の原因は人頭税だという。いうまでもなく、人頭税は琉球王府が宮古・八重山諸島の島民十五歳から五十歳までの男女に人頭割りに賦課した重税で一六三七年から一九〇三年まで続いた。ただ、比川住民脱島の事実関係は明らかでない。ちなみに、波照間島平田村民の脱島は、『八重山島年来記』<sup>(8)</sup>によつて確認できる。同書によれば、一六四八年（順治五）、百姓四、五十人が「大波照間」をもとめて脱島し、同島詰の役人が罷免されている。脱島者が楽土と見た「ハイ・ドナン」や「パイ・ハテローマ（南波照間）」については南洋とも考えられるが、近隣の台湾周辺諸島か、<sup>(9)</sup>先進国たる中国と見るのが妥当であろう。殊に、当時から既に沖縄諸島の島民は、中国とかなり自在に私的交易を行っていたのである。

## 六 民俗関係伝承

### 1 大草鞋流し

「往昔、台湾人該嶋へ渡り、男女ヲ生捕り食へリト言伝ニテ、今モ年一回某ノ祭神ニ、丈ケ二尺余ノ大草鞋ヲ造り、台湾嶋へノ風向ヲ待テ流スノ習慣アリ。之レ其食人ノ来ルヲ恐レ、予メ長人アルトノ虚威ヲ示スニ出テタリト云フ。」

【笹森 一八九四】

この習慣については本山桂川も『与那国島図誌』に記しているが、「ドーモノムヌン（害虫・害鳥駆除の、禁厭の儀式。この日、田畑の虫を採り、草履に乗せて海に流す）」の誤伝ではないかとする。須藤利一も昭和十一年頃、既にこの習慣は失われていると報告している（『南島覚書』）。しかし、池間栄三氏は、旧集落ダンヌ（壇野）村にこのような習慣を行ったという伝説のあることを指摘し、この村が海賊船に脅かされていたと推測している。ダンヌ村は、久部良の北東五〇〇メートルの高台にあり、海側に面した東・北・西は断崖で、今も村を囲った石垣が残っているという。前述したように、この集落が、サンアイ・イソバの兄弟の一人が按司となつて統治した村である。なお、現在、久部良御嶽で異国船・大国船を、久部良邑根で異国人・大国人の退散祈願を行うという。久部良邑根の祈願祭は旧暦の十月・十一月の村祭り中、最初の庚申の日【教委 一九七九】。

### 2 久部良割

久部良集落北側の海岸にある（後掲地図参照）。周辺一帯は景勝地で、県指定の名勝。平らで広い岩場があり、これをクラブ・フリシという。久部良割は、このフリシの一角の、岩の割目のことで、全長約十五メートル、幅約三・五メートル、深さ七メートルである（写真<sup>5</sup>）。

かつて、村々の妊婦を集めて、幅三・五メートルもあるこの

岩の割れ目をとばせた。丈夫な妊婦は、必死の勢いでとび越えたが、とべない者は転落死したと語り伝えられている。

【教委 一九七九(文)】

この習俗については、須藤利一や池間栄三氏も記しており(前掲書)、いずれも人口抑制のためとしている。与那国町教育委員会や池間氏は、この残酷な習俗を行わなければならなかった真の原因は、王府の人頭税にあるとしてこれを糾弾している。ただ、いつ頃からこのような人口抑制策がとられたのか、不明である。今、久部良割のそばには、線香をたむける香炉台があり、それをブロックで囲って拝所としている。久部良割の人骨の有無は未確認。

### 3 トウング田(人升田)

旧島仲集落跡の南西側にある、かつての天水田。四角い約一町歩の水田に全島民を集め、はみ出した人数だけ殺してしまつたという傳説がある。【須藤 一九四四・教委 一九七九(文)】

須藤利一は、当時の人口が四万人あったとし、この絶対的過剰人口を減殺するために行われたとする。地元の教育委員会や研究者は、人頭税の悪弊とする。なお、同教委の前掲書では、非常召集をかけられたのは、満十五歳から五十歳までの男子とする。とすれば、人頭税対象の男子ということになる。現地は今、約三反に分割され、

キビ畑になっている(写真6)。所在地Ⅱ与那国町盤田二六四七の内。

ここでは、以上を記すにとどめる。絶海の孤島ゆえに、背負わざるを得なかった、この島の苦難の歴史や現実の生活が些かなりともご理解いただければ幸甚である。

### 注

1 朝鮮の済州島に三姓穴という地中の小穴があり、ここを聖地としてあがめている。この三つの穴に通じる地中から三神人が湧き出てそれぞれ配偶者を日本から迎え、国を開いたという神話がある。「高麗史」地理志・『世宗実録』地理志などに記事がある。これらの書によれば、この地中の穴は、漢拏山北麓の毛輿穴。ここから生まれた神は、良乙那・高乙那・夫乙那の三神人。彼らは狩猟生活をして暮らしていた。ある時、島の東海に流れついた箱を開けると、三人の処女と駒・子牛、五穀の種が現われた。三姉妹は日本の王からつかわされた女性である。三神人はそれぞれ姫をめぐり、農牧を始め、子孫を育て、島の繁栄の基礎を築いた。

2 池間栄三著『與那国の歴史』(自家版。一九七二年再版)。

3 前注2に同じ。

4 那根亨『西表島の伝説』(自家版。一九七四年発行)。著者は教育者。四十年余、教員をつとめた。この著は、古文書等の史料にもとづき、児童向けに書かれたもの。

5 寡聞にして『宮古旧記』の原本の所在を知らぬが、その複写本が平良市立図書館にある。ここでは稲村賢敷著『宮古島旧記』史歌集解(一九七七年至言社刊)所収の『宮古旧記』に拠った。玄雅のウニトラ討伐を一九二二年とするは、牧野清『新八重山歴史』(一九七二年刊)・池間栄三氏前掲書。

6 前注に記した稲村賢敷著所収の『雍正旧記』に拠った。なお、下段に







写真1・新川鼻沖の  
海底宮殿(?)

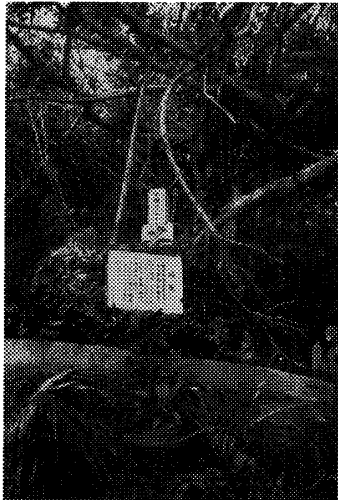


写真3・サンアイイソバの碑



人升田の標示板



写真2・イヌガンの洞穴

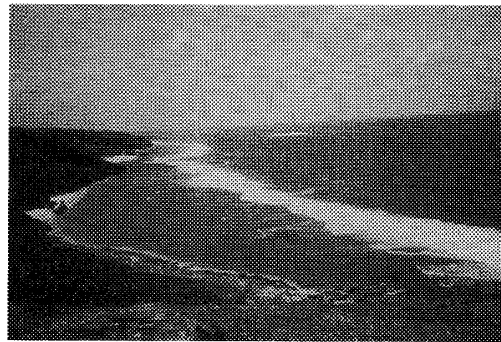


写真4・ナーガンシ

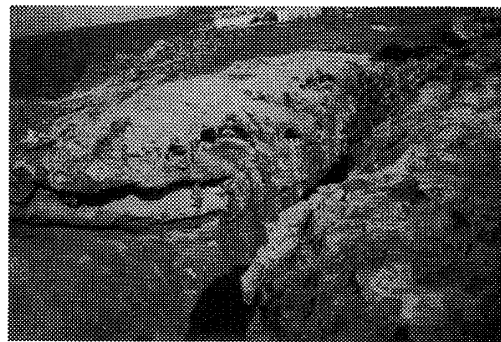


写真5・久部良割

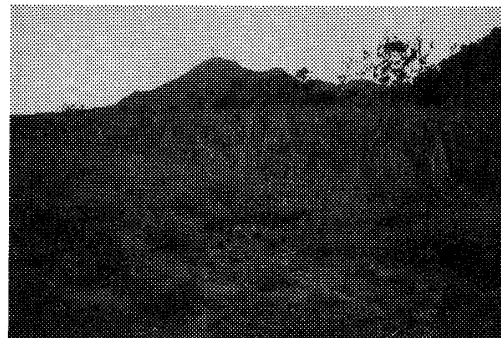


写真6・人 升 田